越境のカニバリズム
―ヴィクトリア朝のトラベル・ナラティブに見る文明の再規定（リマッピング）―

伊　藤　正　範

要　旨

おとぎ話の「赤ずきん」において、〈人食い〉との出会いと帰還が共同体のアイデンティティを描き直すプロセスと重なっているように、ヴィクトリア朝のトラベル・ナラティブにおいても、境界を越えた異世界に赴く旅人は、自らが属する文明共同体の在処を換喩（シネクドキ）として体現していく。本稿ではダーウィン『ビーグル号航海記』、ウェルズ『タイムマシン』、コンラッド『闇の奥』を取り上げ、ダーウィニズムの浸透に伴い亢進する退化への社会的不安が、トラベル・ナラティブの語りにどのような影響を与えているかを探る。

キーワード：トラベル・ナラティブ（travel narrative）、ダーウィニズム（Darwinism）、ヴィクトリア朝（Victorian era）、退化論（degenerationism）、植民地主義（colonialism）

I　イントロダクション――「赤ずきん」の森

「赤ずきん」とは、ある種の越境の物語だ。現代において流通している幼児むけの絵本はもちろんのこと、1697年のペロー版でも、1812年のグリム版でも、赤ずきんは体の悪いおばあさんへの届けものを母親から言付かり、森へと入っていく（新倉 176、金田 267-68）。自らが暮らす村の境界線を越え、狼のような危険な存在が住まう森へと一人で足を踏み入れていくのだ。しかしこの物語における「越境」は、単にそうした物理的なボーダーを越えるこ

とにとどまらない。その後、森の道を進む赤ずきんは狼と出会い、やがておばあさんのベッドにもぐり込んだ狼と件の有名な問答を繰り広げることになるのだが、この狼とは、そしておばあさんとはいったい何者なのだろうか。それを突き詰めていくと、そこには共同体そのものの境界にまつわる物語が浮かび上がってくる。

カール＝ハインツ・マレ（Carl-Heinz Mallet）による、「幼くて、無邪気なヒロインが、エロティックな願望を掻き立てる」（102）という「赤ずきん」の読みは決して的はずれなものではない。事実、この少女が狼に食べられたところで終わるペロー版の末尾には「教訓」なるものが付され、「うちとけて愛想よくもの柔かで／若いお嬢さまがたの後をつけて／家の中まで、ベッドの脇にまで入りこむ」ような「優しげな狼たち」への警告がはっきりとしたためられている（新倉 180）。しかし、この物語を単純な性的教訓譚として読み込もうとすると、おばあさんの存在にちょっとした居心地の悪さを覚えてしまう。そもそもなぜ狼は森で出会った少女をその場で食べてしまわずに、わざわざ先回りをして、とりたてて美味しそうでもない老婆をメインディッシュの前に飲み込み、そして彼女になりすまして待つ、などという面倒な手順を踏んだのだろうか。それに、どうして赤ずきんの家族はこの年老いた病気の血縁者を、同じ家でもなければまして村内の住まいでもなく、「村から三十分ぐらい」（グリム版、金田 268）もかかる森の中に独りで住まわせていたのだろうか。もしかすると森に独り暮らす老婆が子供を食べるという筋立てに、何らかの物語上の重要性があるのではないだろうか。

もちろん彼女は狼の気の毒な被害者だし、実際に赤ずきんを食べるのは彼女になりすました狼だ。だが、「森に住み、幼い子供を食べようとする老婆」という要素だけに絞って見ると、「ヘンゼルとグレーテル」の魔女やロシア民話のバーバ・ヤーガなど、種々の〈同類〉が存在するのである。実際、ジャムシード・J・テーラーニ（Jamshid J. Tehrani）の定量的手法に基づく民話研究では、「赤ずきん」というおとぎ話が、口承で伝えられていく中であたかも進化の系統樹のような線を辿りながら少しずつ形を変えてきたことが明

らかにされている（1-2）。テーラーニによると「赤ずきん」は「おおかみと七匹の子ヤギ」と共通の起源に属しており、狼が小さな子供たちを食べるという後者の物語が１世紀頃に誕生してからおよそ千年後に「赤ずきん」へと枝分かれしていったという（2-7）。だとすれば、「ヘンゼルとグレーテル」などに登場する人食い魔女と「赤ずきん」の老婆が同じ系譜に属していると捉えることも、決して的外れなことではないのではないか。

それについては推測の域を出ないのだが、佐藤嘉一は、この老婆が森の住人であり、また赤ずきんに「赤いビロードのずきん」をプレゼントするという点から「『常民 common people』のもつ『共通感覚』から偏倚した、自由な存在、〈むら〉の規範から「ずれ」た独特の生活スタイルの持ち主（奇人、魔女）」であると見る（27）。少なくとも赤ずきんのおばあさんが狼と同様の越境者、すなわち物理的にも社会的にも村落共同体の枠外に位置する存在であることは想像に難くない。そして奇抜な赤いずきん以外をかぶろうとしない女の子もまた、森に足を踏み入れることにより――グリム版ではさらに「脇道にそれる」ことにより――共同体の規範の外側へと逸脱していく。その世界において、彼女は単に狼に襲われる無垢な少女ではない。血縁であるおばあさんが人食い狼のダブルであるならば、赤ずきん自身もまた社会的な越境者であり、潜在的な〈人食い〉なのだ。「ヘンゼルとグレーテル」で幼い兄妹が魔女をオーブンで焼き殺すように、森に足を踏み入れるおとぎ話の主人公たちは、村の境界を越えると同時に共同体的規範からの一時的な離脱者となる。そこから村に帰還することによって、再び秩序の中へと組み戻されていくのである。

共同体とその規範にまつわるこうした物語の背後には、捕食や性的陵辱といった原初的・普遍的脅威にとどまらない何かが潜んでいるように見える。それを探る手がかりは「赤ずきん」の舞台となる村と森との関係にある。資本主義到来以前の村落共同体が農耕を基盤とした定住型社会であったならば、森に住む狼や魔女とはその枠内から放逐された罪人や身寄りのない老女であり、そうした人々と共同体の住人との軋轢の歴史については、当時の人狼伝

説や魔女裁判にまつわるさまざまな資料から読み解くことができる。[1] いわば「赤ずきん」とは、特定の時代の社会とそれを構成する個人個人との多様な関わり方についての物語、言い換えるならば「『前近代（プレモダン）』社会（共同体）に生きる人間の『アイデンティティ』問題」（佐藤，27）にまつわる物語なのである。

そして議論をさらに一歩先に進めるならば、このトラベル・ナラティブは個人のみならず、共同体のアイデンティティそのものとも密接な関わりを有している。赤ずきんという少女を村全体の提喩（シネクドキ）として捉えるならば、境界を越えて忌むべき〈人食い〉の領域への往還を果たす彼女の道程には、逸脱と秩序回復を通して共同体のあるべき場所を再規定（リマッピング）していくプロセスが重なり合って見えてくるのである。そしてこうしたカニバリズムを内包する旅の物語は、その後も幾世紀にわたってさまざまに形を変え、共同体固有のアイデンティティを扱い続けていくこととなる。ここからは19世紀イギリスのトラベル・ナラティブ３編へと目を移しながら、ヨーロッパという大きな共同体のアイデンティティにまつわる語りについて検証していく。

II　ダーウィン『ビーグル号航海記』

ケンブリッジ大学クライスツ・カレッジを卒業したてのチャールズ・ダーウィン（Charles Darwin）に届けられた１通の手紙は、軍艦ビーグル号による世界周航の旅へと彼を誘うものであった。南アメリカ大陸や太平洋の島々の水路調査を主目的として1831年にプリマスを出港したビーグル号の２回目の航海において、ダーウィンは地理や博物誌の調査に携わりながら、いまだ西洋世界の大部分にとって未知であった世界を巡った。その旅の成果である『ビーグル号航海記』（*The Voyage of the Beagle*）は、当初、船長ロバート・フィッツロイ（Robert Fitzroy）を編著者とする４巻本の１冊として1839年

1）　中世以降の人狼による食人の伝承、ならびに嫌疑をかけられた人々の審判と処刑の歴史についてはセイバイン・ベアリング＝グールド『人狼伝説――変身と人食いの迷信について』参照。魔女の裁判と処刑の歴史については浜林正夫『魔女の社会史』、ならびにジャン＝ミシェル・サルマン『魔女狩り』参照。

に刊行された。もともとこの巻はフィッツロイの航海記を科学的観点から補足する役割を担っていたが、思いのほか売れ行きが良かったため、後に表題をあらためて単独で版を重ねていく。[2)]

そうした好調を後押ししていたのが、この本の単なる科学的記述にとどまらない、旅行記としての側面であった。当時の『クォータリー・レビュー』（*Quarterly Review*）に掲載された書評では、ダーウィンの巻が「科学的関心を持つ者だけの興味を引く」のではないこと（“it is not to the scientific alone that Mr. Darwin's volume will prove highly interesting”）、そしてDarwin自身が「ペンを携えた一級の風景画家」（“a first-rate landscape-painter with the pen”）であることが強調されている（Review of *Narrative,* 233）。事実、このテクストでは数多くの特徴的な風景描写が展開する。中でも、タヒチの山腹から見た峡谷と鋭峰が織りなす「崇高な光景」（“a sublime spectacle,” 423）を強調する描き方は、18世紀末から流行したロマン派的風景描写の系譜に連なるものであり、この点からもダーウィンが当時の旅行文学における絵画的描写の流行を意識していたことは間違いないだろう。

そしてこのテクストには、もう一つの文学的バックグラウンドを見て取ることができる。南アメリカ南端部に位置するフエゴ島の「水際までひとかたまりの陰鬱な密林で覆われた」（“covered to the water's edge by one dense gloomy forest”）光景は、「これまで見た何ものとも似ても似つかない」（“how widely different it was from any thing I had ever beheld”）という印象をダーウィンに抱かせる（216）。そして「不規則に転がる岩のかたまりや根こぎにされた木々」（“irregular masses of rock and torn-up trees,” 222）が散らばるこの土地を支配するのは、この世のものならぬ存在だ。

> The entangled mass of the thriving and the fallen reminded me of the forests within the tropics—yet there was a difference: for in these still solitudes, Death, instead of Life, seemed the predominant spirit.（222）

2）『ビーグル号航海記』出版の経緯については Browne 413–18, Dawkins xxvii 参照。本論文が依拠しているテクストは1845年の第2版である。

半ば擬人化された「死」に支配されるこの荒れ地は、あたかもウェルギリウス『アエネーイス』において放浪のトロイア王子が足を踏み入れる黄泉の国のような光景を呈する。[3] ここが他の熱帯雨林とは異なる世界であることを強調しながら、ダーウィンは古典的トラベル・ナラティブにおける冥府くだりのモチーフを借りて、自らのフエゴ島訪問記を脚色するのである。そして『アエネーイス』の冥界に住まう異形の怪物たちもまたこの地に姿を見せる。頭に羽根飾りを巻いたり、顔にペイントを施したりした原住民たちの姿は、「『魔弾の射手』のような芝居で舞台上に出てくる悪魔」(“the devils which come on the stage in plays like Der Freischutz,” 217) に酷似するものとしてダーウィンの目に映るのである。

そしてこの「悪魔」たちとの出会いを通して、テクストはもう一つの原初的トラベル・ナラティブへと接近していく。

> The different tribes when at war are cannibals. . . . [I]t is certainly true, that when pressed in winter by hunger, they kill and devour their old women before they kill their dogs: the boy, being asked by Mr. Low why they did this, answered, “Doggies catch otters, old women no.” (226)

冬の食糧不足を乗り切るために老婆を殺して食べるという「人食い(カニバル)」たちの描写は、中世以前に起源を持つおとぎ話から19世紀の博物学者の手になる旅行記へと、時代を超えてカニバリズムの物語を侵入させていく。そしてそれを通してテクストが提示するのは、「赤ずきん」と同様の共同体のアイデンティティにまつわる語りだ。それは、テクストの片隅に挿入されたひとつの〈驚き〉を介してはっきりと形をなす。現地人とヨーロッパ人との違いが「いかに大きいものであるか」(“how wide was the difference between savage and civilized man,” 217) という事実を目の当たりにした若きダーウィンは、「彼らが同類であり同じ世界の住人であるということが信じがたくなってく

3) 放浪のアエネーアースが亡き父を冥界に訪ねる第6巻では、「森の道」を通ってたどり着いた地下界の入口に、「病い」、「老年」、「飢餓」、そして「死」などの擬人化された存在が住まう様子が描かれる (369-70)。

る」（“one can hardly make oneself believe that they are fellow-creatures, and inhabitants of the same world,” 225）ような思いに囚われる。こうした語りの背後には、ヨーロッパという大きな共同体の境界線を明確化しようとする差異化の力学が見え隠れする。

本書において奴隷への残酷な仕打ちを告発したり、奴隷制度の廃止を訴えたりなど、ダーウィンは当時のイギリスの知識人の中でも群を抜いて人種的偏見の排除に努めようとしていた人物であった。しかしながら、ジョン・タルメッジ（John Tallmadge）はこのテクストが本質的に人種主義的であると主張する。テクストに張り巡らされた修辞的戦略の上に、ダーウィン自身の反文化相対主義的な人格が入念に構築され、そうした人格を通して、非ヨーロッパ世界の文化がイギリス的な基準と比べていかに劣っているかが提示されているというのだ（340-44）。

そうしたダーウィンの姿勢は、ビーグル号におけるある一つの実験にまつわる記述にも見出すことができる。船長のフィッツロイは、1826年から30年にかけてのビーグル号１回目の世界周航において４人のフエゴ人たちをイギリスに連れ帰り、私費にて教育を施した上、天然痘で死亡した１人を除く３人をダーウィンの乗る２回目の航海に同乗させていた。教育によってフエゴ人たちを文明人に近づけようとするこの一大プロジェクトの最大の成果は、ジェミー・バトン（Jemmy Button）と名付けられた被験者の存在であった。３年間のイギリス生活を経て、手袋をつけ、髪をこぎれいに整え、よく磨かれた靴を履き、そして鏡を覗き込むことを愛するようになったバトンについて、ダーウィンはこう語る。

> It seems yet wonderful to me, when I think over all his many good qualities, that he should have been of the same race, and doubtless partaken of the same character, with the miserable, degraded savages whom we first met here. (219)

他の現地人たちとは比べものにならないほど「多くの良い性質」を持ったバトンに率直な驚きを表すダーウィンの筆致に、スティーブン・ジェイ・グー

ルド（Stephen Jay Gould）は、生物学的に固定された差異を認めない「改良論者」（“meliorist”）としてのダーウィン像を見出す（419）。他方で、ルース・メイヤー（Ruth Mayer）が指摘するのはダーウィンのテクストに潜む両義性だ。フエゴ人たちがしばしば顕著な「模倣の力」（“power of mimicry,” *Voyage* 218）を示すとする『ビーグル号航海記』の一節に着目しながら、メイヤーはフエゴ人たちの文明化を可能にしたのが、高次の精神性などではない、単なるうわべのみの「模倣」の能力であるというダーウィンの認識をあぶり出す（202-3）。

「（イギリスへの）訪問が彼らにとって何かの役に立ったのかどうかは大いに疑わしい」（“I fear it is more than doubtful, whether their visit will have been of any use to them,” 238）とするダーウィンの語りには、後天的修正が不可能な絶対的差異を強調することによってヨーロッパ世界そのものの境界線を再規定（リマップ）しようとする力学が散りばめられている。「赤ずきん」というトラベル・ナラティブが森の〈人食い（カニバル）〉たちとの出会いを通して村落共同体の在処を描き直す試みであったならば、『ビーグル号航海記』というトラベル・ナラティブは、非ヨーロッパ世界の〈人食い（カニバル）〉たちとの邂逅を経て自らの人種的アイデンティティを再強化しようとする試みであると言えよう。大航海時代から植民地主義を経て世界の地図が拡大していくにつれ、〈内〉と〈外〉の定義が変遷し、器としての物語もまたその役割を変えていくのである。

Ⅲ　ウェルズ『タイムマシン』

80万年後の未来を訪問するH・G・ウェルズの『タイムマシン』（H. G. Wells, *The Time Machine,* 1895）もまた、ある種のトラベル・ナラティブとみなすことができるだろう。もっとも時間旅行という、以降のSFにおいて常套化するモチーフをもってのみそう定義づけられるのではない。文明の衰退した未来世界において、怪物のような容貌をした住人たちにタイムマシンを奪われた主人公は、奪還を目指して彼らの地下住居へと降りていく。異形の怪物がひしめく『アエネーイス』の冥府を思わせるような世界への降下は、

主人公にある大きな衝撃をもたらすことになる。そのきっかけとなるのは、暗闇の中、マッチの明かりに照らし出されたものであった。

> The place, by the by, was very stuffy and oppressive, and the faint halitus of freshly-shed blood was in the air. Some way down the central vista was a little table of white metal, laid with what seemed a meal. The Morlocks at any rate were carnivorous! Even at the time, I remember wondering what large animal could have survived to furnish the red joint I saw. (52)

かすかな血の臭いとともに彼の目に入り込んできたのは、地下世界の住人であるモーロック（Morlock）たちの食卓に乗った、「赤い関節」のようなものである。後にこの光景を反芻するタイムトラベラーは、その正体が地上で暮らすもう一つの人種、イーロイ（Eloi）の肉であるという衝撃的な洞察に至る。食糧不足に直面するモーロックたちにとって、日の当たる世界に暮らすイーロイたちは「単なる肥育された家畜」（“mere fatted cattle,” 59）に過ぎなかったのである。

この未来世界において主人公が見出すのは、人類が二つの種族に枝分かれしているという事実である。一つは子供のように小さく華奢な容姿をし、４～５歳児程度の知能しか持ち合わせていないイーロイ、もう一つは地下に住み、瞼のない大きな目と顎を持つ、異形のモーロックである。やがて彼は、前者は19世紀末の資本家階級が、後者は労働者階級が長い年月を経て変化していった姿だということに気づく。テクストのこうした未来世界が、1859年の『種の起源』（*The Origin of Species*）出版以降にヨーロッパが経験した大きな認識論的変化を反映したものであることには疑問の余地がないだろう。ダーウィンが提唱した自然選択説とは、生物の変異性と多産性を基盤とする理論であり、さらにその前提に地質学者のチャールズ・ライエル（Charles Lyell）によって導き出された漸進的変化説、すなわち地球が従来想定されてきたよりもはるかに長大な時間を経てゆっくりと変化してきた、という考えを置くものであった。これによりダーウィン以後の時代に少しずつ浸透していったのは、進化とは微細な偶然が気の遠くなるほどの年月をかけて積み

重なった結果にすぎず、必ずしも進歩へと向かうものではないという洞察であった（Bowler 21-22）。こうした方向性の不在がウェルズの未来世界を作り上げているということは、タイムトラベラーが遭遇したモーロックの描写を見れば明らかである。

> I turned with my heart in my mouth, and saw a queer little ape-like figure, its head held down in a peculiar manner, running across the sunlit space behind me. . . .
>
> ‘My impression of it is, of course, imperfect; but I know it was a dull white, and had strange large greyish-red eyes; also that there was flaxen hair on its head and down its back. But, as I say, it went too fast for me to see distinctly. I cannot even say whether it ran on all fours, or only with its fore-arms held very low.（45）

19世紀末の劣悪な生活環境に置かれた労働者階級の末裔は、80万年という長い歳月を経て、知性も道徳性も退行した、四つん這いともつかない格好で歩く猿のような食人種へとなり果てていたのである。

そして、顎のない顔や瞼のない大きな目を持つモーロックたちが「いかに吐き気を催させるほど非人間的に見えた」（“how nauseatingly inhuman they looked,” 54）かを、あるいは彼らが「３～４千年前の我々の人食い祖先たちよりも非人間的であり、遠く隔たったもの」（“less human and more remote than our cannibal ancestors of three or four thousand years ago,” 59）であるかを強調する語りには、『ビーグル号航海記』のトラベル・ナラティブに浸潤していたのと類似する差異化の力学が見え隠れする。当たり前のように召使いを雇うタイムトラベラーや、その客間に集う中産階級の医者や政治家たちと、日の差し込まない工場で額に汗する労働者たちとの間には、未来世界における生物学的差異へと発展していくほどの隔たりがすでに存在しているということなのだ。

しかし50年以上前のダーウィンのテクストとは異なり、その差異が決定的なものではないこともまた確かである。「人食い」へと結びついていく退化

はもはや外部ではなく、内部の、いわば都市部のスラムに内在する病として提示されているからだ。そうした退化への懸念は、ダーウィン以後の世界を次第に席巻する一連の退化論言説においても共有されていた。イタリアの犯罪人類学者チェーザレ・ロンブローゾ（Cesare Lombroso）の主著『犯罪者』（*L'uomo delinquente,* 1876）では、例えば後退した額、肥大化した頬骨などは「先祖返り」（atavism）の特徴とみなされ、その持ち主の「退化者」（degenerate）としての生来的性質を示唆しているとみなされた。ロンブローゾが「しばしば小さく後退している」（"often small and receding," 17）と分析する犯罪者の顎はモーロックの「顎のない顔」（"chinless faces," 54）と重なり合うし、「前足を使って歩いたり登ったりする猿」（"apes, whose fore-limbs are used in walking and climbing," 7）を思い起こさせるような長い腕は、四つん這いで歩くモーロックの姿に見出される。[4)]

さらに、この時代の退化とは都市の貧困層にのみ結びつけられるものではなかった。『タイムマシン』と同年の1895年に英訳版が出版されたマックス・ノルダウの『退化』（Max Nordau, *Entartung,* 1892–93）は、ロンブローゾの犯罪者論に大きく依拠しつつも、「生来的な犯罪者」を「単に退化者の下位区分にすぎない」（"nothing but a subdivision of degenerates," 17）とし、世紀末の芸術・文学を広く蝕む「退化」をあぶり出していった。[5)] そうした文化活動の中心的な担い手であった中産階級が、知能面や身体面で退行し、あまつさえモーロックたちの食糧と成り果てたイーロイとして具現化するウェルズの未来世界は、退化がもはや外部のものではなくなりつつあったポスト・ダーウィン社会のまさに鏡像を示しているのである。

地理的な隔絶性を人種的なそれへと転化し、ヨーロッパ共同体のアイデンティティを再確認しようとした『ビーグル号航海記』の語りとは異なり、『タイムマシン』の語りは、帝国主義国家のまさに中枢都市において生じつ

4） 以降の引用はすべて英語版 *Criminal Man: According to the Classification of Cesare Lombroso*（1911）に基づく。
5） 以降の引用はすべて英訳版 *Degeneration*（1895）に基づく。

つある〈人食い〉への道筋を照らし出しながら、共同体の内部に潜む退化を可視化してみせる。ここでのトラベル・ナラティブは、もはやコミュニティの境界線を再確立するためのストラテジーとしては機能していない。時代を超えて19世紀末の語りに再登場したカニバリズムは、むしろ〈内〉と〈外〉が綯い混じる文明世界の危うさをテクストに投影するのである。

Ⅳ　コンラッド『闇の奥』

地図の空白地帯を冒険するという子供の頃からの情熱を胸に、蒸気船の船長となったマーロウ（Marlow）が遡航していくのは、「とぐろをほどいた巨大な蛇」（“an immense snake uncoiled,” 108）のような川だ。ジョーゼフ・コンラッドの『闇の奥』（Joseph Conrad, *Heart of Darkness,* 1902）は、ヨーロッパからアフリカ大陸への、そしてさらに（作中で明言されてはいないものの）コンゴ川の上流を目指すマーロウの旅を描いた、ある種のトラベル・ナラティブである。そしてこの旅は、「大陸の中心に向かっていくというよりは、まるで地球の中心に向けて旅立とうとしているかのような」（“I felt as though, instead of going to the centre of a continent, I were about to set off for the centre of the earth,” 113）感覚を伴いながら、『ビーグル号航海記』と同様の、冥界巡りを喚起するイメージに彩られていく。

> At last I got under the trees. My purpose was to stroll into the shade for a moment; but no sooner within than it seemed to me I had stepped into the gloomy circle of some *Inferno*. . . .
>
> “Black shapes crouched, lay, sat between the trees, leaning against the trunks, clinging to the earth, half coming out, half effaced within the dim light, in all the attitudes of pain, abandonment, and despair. . . . And this was the place where some of the helpers had withdrawn to die. (118; emphasis added)

マーロウが足を踏み入れた「地獄」を思わせる木陰――曰く「死の森」（“the grove of death,” 121）――には、『アエネーイス』の冥界の怪物たちを思い起

こさせるような「黒い影」が蠢く。それは苦痛にうめき、絶望にあえぎながら死を待つ黒人奴隷たちの姿である。

まるで「世界の原初の始まり」(“the earliest beginnings of the world,” 136)へと向かうかのような蒸気船の旅には、常にこの現地人たちの姿が付きまとう。そして、ときにそこに重なり合うのは食人のイメージだ。

> I don’t pretend to say that steamboat floated all the time. More than once she had to wade for a bit, with twenty *cannibals* splashing around and pushing. . . . And, after all, they did not eat each other before my face. . . . (138; emphasis added)

河岸に潜む他部族との間で緊張が高まる中、船上で使役される奴隷たちは敵を捕らえて渡すようにとマーロウに要求する。「食べる」(“‘Eat ’im!’” 144)ため、というのが彼らの言うその理由だ。ここでの語りが、『ビーグル号航海記』と同様、カニバリズムの暴露を通して文明と非文明との境界線を明確化しようとしていることは明らかだろう。

そして現地人たちの描写にもまたそうした狙いがかいま見える。数ヶ月の訓練を受け、「改良された見本」(“improved specimen”)となった一人の黒人は、「滑稽な猿まねのズボンを履き、羽根飾りのついた帽子をかぶり、後ろ足で歩く犬」(“a dog in a parody of breeches and a feather hat, walking on his hind-legs”)のような姿で、「ヤスリ掛けした歯」(“filed teeth”)や頬に刻まれた「装飾用の傷」(“ornamental scars”)を見せながら釜焚きに従事する(140)。「改良をもたらす知識をいっぱいに抱え」(“full of improving knowledge”)ながらも、彼にとって蒸気船のボイラーは「不思議な魔術」(“strange witchcraft”)でしかなく、見張りを怠らないのは「ボイラーの内側にいる悪霊が激しい喉の渇きから怒り出す」(“the evil spirit inside the boiler would get angry through the greatness of his thirst”)と信じているからだ(140)。こうした描写に透けて見えるのは、まさに『ビーグル号航海記』においてダーウィンが示したのと同種の、現地人の「改良」がむしろ彼らの有する「模倣の力」によるものにすぎないという皮肉まじりの見解である。実際に川蒸気

船の船長としてコンゴ自由国に赴き、非ヨーロッパ世界を目の当たりにしたコンラッドは、ビーグル号に乗って自らフエゴ島を訪れたダーウィンと同様の〈旅人〉の目線から、文明と非文明の間に埋めがたい溝が横たわることを明るみに出すのである。

他方で、この『闇の奥』でもやはり、境界線は揺るぎなくそこにあるものではない。現地人の襲撃に慌てふためき、「脅えた眼差し」(“scared glances”)でウィンチェスター銃を構える白人たちの姿は、「本質的に落ち着いた」(“essentially quiet”)表情で、ややもすると「笑みを浮かべ」(“grinned”)ながら操船に従事する黒人奴隷たちとの間に逆転したコントラストを形成する(143-44)。そもそもこのアフリカ大陸において、文明人たちは決して優れた存在ではない。到着したマーロウが知るのは、自分が指揮をとるはずのボートが2日前に彼を待たずして出航し沈んでしまったという事実だし、そのボートの修理はリベットが届かないため遅々として進まない(122-23, 130-31)。レンガ作りを仕事としているはずの男はあてもなく——まるで不条理劇の一場面のように——何かを待ち続けているだけで、現地出張所にはレンガの欠片も見あたらない(126)。他の白人たちもまた、みな何かを待ちながら無為に日々を過ごしているだけだ(126)。

そして文明世界の境界線の不確かさは、語りにある種の不安と焦燥を差し挟んでいく。

> The earth seemed unearthly. We are accustomed to look upon the shackled form of a conquered monster, but there—there you could look at a thing monstrous and free. It was unearthly, and the men were—No, they were not inhuman. Well, you know, that was the worst of it—this suspicion of their not being inhuman. It would come slowly to one. They howled, and leaped, and spun, and made horrid faces; but what thrilled you was just the thought of their humanity—like yours—the thought of your remote kinship with this wild and passionate uproar. (139)

眼前に広がるまさに『アエネーイス』の地獄を思わせるような「この世のも

のならぬ」世界において、しかし、マーロウが目にするのは「征服された怪物の枷をはめられた姿」ではなく「怪物的で自由な存在」だ。彼は、そこに住む人々が――「非人間的だった」とおそらく言いかけたのを打ち消して――「非人間的ではなかった」と宣言する。同じく地獄のトポスを取り込んだ『ビーグル号航海記』とは異なり、コンラッドの語りは決して類縁性を否定しない。そこに西洋人と同様の確かな「人間性」があるのではないかという疑念が、テクストに楔を打ち込んでいくのである。

そして境界線の曖昧化は、マーロウの旅の最終目的であるカーツ（Kurtz）との出会いで山場を迎える。暗闇で目隠しをまとい、松明をかかげる女性の姿を描いたかつての彼の絵に象徴されるように、カーツは植民地主義の大義を信じ、文明という光の使者として暗黒の大陸に足を踏み入れた若者であった。しかし、旅の果てにたどり着いた奥地ステーションでマーロウを待ち受けていたのは、そこでの生活を通して果てしない堕落へと導かれたカーツの姿だった。家を取り囲む柵に自らが虐殺した現地人たちの頭蓋骨を並べ、母国に婚約者がいるにもかかわらず現地人の女性を愛人として囲い、そうやって自らの王国に君臨してきた彼の姿は、ロンブローゾやノルダウの退化論と呼応しながら、ヨーロッパという文明共同体の境界線を激しく揺るがしていくのである。

V　まとめ――換喩（シネクドキ）としての旅人

『ビーグル号航海記』、『タイムマシン』、そして『闇の奥』へと受け継がれてきた「赤ずきん」的トラベル・ナラティブの要点は、換喩（シネクドキ）としての旅人が境界線の外側で〈人食い〉と邂逅することを通して――より正確に言うと自らの〈人食い〉としての可能性と邂逅することを通して――共同体のアイデンティティの揺らぎを体現していく点にある。だがおとぎ話の主人公が試練を経て自らの揺らぎを取り払い、共同体のあるべき姿を規定し直すことに成功する一方で、19世紀の旅人は次第に揺らぎを制御できなくなり、〈自〉と〈他〉との境界線は融けほどけていく。そのことを決定づけるのは、『闇

の奥』において、帰還したマーロウがカーツの婚約者に対してついた嘘だろう。カーツの遺した言葉を尋ねられたマーロウが、「恐怖だ！　恐怖だ！」（“The horror! the horror!”）という壮絶な今際の叫びを脳裏にこだまさせながらも咄嗟に「あなたの名」（“your name,” 186）であったと嘘をついたその刹那、マーロウ自身の不可逆的な変化は決定的なものとなる。その嘘に微塵の疑念も抱かない婚約者と彼との間には、すでに越えることのできない溝が横たわっているのである。幼い頃に世界地図の空白地帯への冒険を夢見ていたマーロウが、ついに果たした旅において見出すのは、文明人としての自己のアイデンティティの動揺と変質であった。かくして19世紀の３編のトラベル・ナラティブの比較は、ダーウィニズムの出現と浸透を経て、次第に文明そのものの在処が揺らいでいく様子を私たちにかいま見せてくれる。それこそが、旧来の聖書的世界観の瓦解を経験しつつあった西洋の、モダンへの苦渋を伴う目覚めであったと言えよう。

（筆者は関西学院大学商学部教授）

引用文献

Bowler, Peter J. *Darwinism.* Twayne, 1993.

Browne, Janet. *Charles Darwin: Voyaging.* Princeton UP, 1995.

Conrad, Joseph. *Heart of Darkness and Other Tales.* Oxford UP, 2002.

Darwin, Charles. *The Origin of Species and the Voyage of the Beagle.* Alfred A. Knopf, 2003.

Dawkins, Richard. Introduction. *Darwin, The Origin of Species and The Voyage of the Beagle,* pp. ix–xxx.

Gould, Stephen Jay. *The Mismeasure of Man.* Norton, 1996.

Lombroso, Cesare. *Criminal Man: According to the Classification of Cesare Lombroso.* Translated by Gina Lombroso Ferrero, G. P. Putnam's Sons, 1911.

Mayer, Ruth. “The Things of Civilization, the Matters of Empire: Representing Jemmy Button.” *New Literary History,* vol. 39, no. 2, 2008, pp. 193–215.

Nordau, Max. *Degeneration.* D. Appleton, 1895.

Review of *Narrative of the Surveying Voyages of H. M. S. Adventure and Beagle,* by Philip Parker King and Robert Fitz-Roy and *Journal of Researches into the Geology and Natural History of the Various Countries Visited by H. M. S. Beagle,* by Charles Darwin. *Quarterly Review,* 1 Dec. 1839, pp. 194–234.

Tallmadge, John. “From Chronicle to Quest: The Shaping of Darwin’s ‘Voyage of the Beagle.’” *Victorian Studies,* vol. 23, no. 3, 1980, pp. 325–45.

Tehrani, Jamshid J. “The Phylogeny of Little Red Riding Hood.” *PLoS ONE,* vol. 8, no. 11, 2013, https://doi.org/10.1371/journal.pone.0078871.

Wells, H. G. *The Time Machine.* Oxford UP, 2017.

ウェルギリウス『アエネーイス』（上）泉井久之助訳，岩波書店，1976.

金田鬼一「赤ずきん」『完訳グリム童話集』岩波書店，1979，267–74頁.

佐藤嘉一「民話『赤ずきん』にみるアイデンティティと社会の問題」『立命館産業社会論集』36巻2号，2000，23–39頁.

サルマン，ジャン＝ミシェル『魔女狩り』池上俊一監修，富樫瓔子訳，創元社，1991.

新倉朗子「赤ずきんちゃん」『完訳ペロー童話集』岩波書店，1982，175–80頁.

浜林正夫『魔女の社会史』未来社，1978.

ベアリング＝グールド，セイバイン『人狼伝説——変身と人食いの迷信について』ウェルズ恵子・清水千香子訳，人文書院，2009.

マレ，カール＝ハインツ『〈子供〉の発見——グリム・メルヘンの世界』小川真一訳，みすず書房，1984.